

実習指導を充実させていくことにより、大学での学びと実習先での実践をよりスムーズにつないでいくことができるのではないかと考える。

### 3. 考察と課題

(1) 各論においては、実習指導センターの訪問調査、指導案作成とその検討、求められる専門職像の把握、実習の自己評価、聞く体験・語る体験、意識調査などが示された。実習分野が異なるが、事前・実習中・事後指導において、共通する側面がある。それは、学生の主体性を育てる指導方法のあり方を追究することである。

(2) 実習への履修条件については、とりわけ4年制大学の各実習指導の現状から、検討を要する課題があるのではないかと考える。

(3) 実習教育と実習事務部門との連携の重要性はいうまでもない。実習学生及び実習施設・機関数の増加、実習種の広がりの中なかで、より効率的な実務体制の確立が必要である。実習指導体制全体の検討の中に事務体制の課題を位置づけていきたい。

以上、2010年度共同研究の報告とする。

## 男性保育者の歌声の実態に関する研究

保育科 鈴木 慎一郎

本研究では、男性保育者の歌声に関する実態調査を行い、男性保育者の歌声における音域の実証的検証を行うことを当初の目的とした。しかし、この目的を究明するには、地声と裏声の「喚声点」の問題を明らかにすることが先決であると考え、当初の研究計画を変更し、保育者養成機関における「喚声点」の問題を含めての発声指導の実態を史的に考察した。

大正から昭和にかけては、草川宣雄が「頭声発声」、福井直秋が「中声発声」を主張し、発声に関する先進的な実践が積極的に行われた時期である。「児童唱歌コンクール」も開催された。このような状況の中、教員養成の場においてどのような発声指導が実践されてきたかについては、先行研究においても十分明らかにされてこなかった。

発声に限定した文部省検定済師範学校用音楽教科書が1種類のみある。それは1932(昭和7)年に共益商社書店から発行された水口廣『中等発声練習教本』である。本研究ではこの教科書を分析することで、教員養成の場における発声指導の内容を明らかにすることを目的とした。

水口に関する先行研究はほとんどない中、岩

崎洋一によって、水口が児童発声における中声発声の支持者として取り上げられている(岩崎1981)。また岩崎によると、水口は昭和の初期頃、熊本県の天草において中声発声の講習を行ったとのことである(岩崎2000)。この点からも、水口が当時の発声指導に対し影響を及ぼしていた実践家であったことがうかがえる。

研究方法としては、第一に『中等発声練習教本』の教材分析を行い、教科書の特徴を明らかにした。第二に水口の実践家としての側面に着目し、水口の発声指導の実際について考察した。

以上の研究結果については、日本声楽発声学会『声楽発声研究』第2号(2011年3月)に発表した。

今後は、音楽教員としての水口のライフヒストリーにも焦点を当てて研究を深めると同時に、今日の保育者養成機関の抱える発声指導とも関連付けて、実践研究を継続していきたい。